

伊勢信仰研究史に関する一考察

濱千代 早由美

1. はじめに

本稿の目的は、伊勢信仰の研究史を概観し、新たな研究の視点を提示することにある。

伊勢信仰をひとことと言えば、伊勢神宮に対する信仰の形態であると言える。伊勢神宮は、皇太神宮（通称・内宮）と豊受大神宮（通称・外宮）、それぞれに付属する120余の別宮・摂社からなり、内宮には天照大神、外宮には天照の御食津神（みけつかみ）である豊受大神が祀られている。おそらく日本で最もよく知られている神社だろう。

しかし、かつては一般の民衆とは無関係の存在であった。律令体制下では、国家神として天皇の祭祀の対象とされたため、「私幣の禁断」によって、皇族の奉幣さえも禁じられていた。それが、平安末期から鎌倉時代にかけて、聖地巡礼への気運の高まりや熊野信仰との関係もあって、伊勢神宮も民衆へと開かれていったという経緯がある。

伊勢神宮は、長い歴史を持ち、それゆえに多岐に渡る問題点を持つ。そこで、この伊勢神宮に対する信仰がどのように研究されてきたかについて、いくつかの視点から整理を試み、現代の伊勢信仰について考えていく方向性を探してみたい。

2. 伊勢信仰研究の傾向

2-1. 研究者の立場と研究傾向

伊勢信仰の研究といっても、その立場によってさまざまな方向性がある。伊勢信仰を、「伊勢」にある「伊勢神宮」を中心とした「信仰」とするならば、「伊勢

研究」と称するのか、「伊勢信仰研究」なのか、あるいは「伊勢神宮研究」なのかによってもその内容はおのずと違って来るだろう。

まず、伊勢神宮の研究には、歴史学や宗教学といった外部からの客観的な視点のみならず、神宮側からの内的視点による研究分野があるのが特徴的である。その場合、神宮の成立についての研究や儀礼研究が大きな研究領域として認められる。歴史学や宗教学においても、同様のテーマについて研究を行うが、大きく違う点は、神宮による神宮研究は、主に、古きを知って「本義」へ帰るためになされるという面も持っていることにある。つまり、信仰への実践を伴った「神学」であり、これは伊勢神宮による「伊勢神宮研究」の側面をもつ。

それに対し、民衆が伊勢を見る視点に立っての研究と特徴付けられる分野が、「伊勢研究」「伊勢信仰研究」である。私は、「伊勢信仰研究」という立場をとっているが、その場合には、伊勢という宗教センター機能を持った都市そのものの研究としての「伊勢研究」をも含んだ、包括的な立場をとる。したがって、伊勢にまなざしを向ける側は「伊勢」という空間の限定を受けない場合もある。伊勢神宮が全国に知られていき、参詣者がおとずれることによって、伊勢が宗教センターとなって行ったとするならば、伊勢信仰が信仰されている広い空間のなかで伊勢を論じた方が、より、その本質に近いのではないかと考えるのである。

2-2. 対象とする時代と研究傾向

伊勢神宮には、周知の通り長い歴史がある。そのため、研究の対象とする時代によって、問題となるテーマもことになってくる。

古代の伊勢信仰をめぐる研究は、当時の伊勢神宮が民衆から遠いところにあったということを反映して、神宮の祭祀、神宮と仏教、伊勢神道といったものが対象とされることが多い。したがって、民衆と神宮とのかかわりや信仰については、研究対象とはなりにくかった。

平安中期以降、貴族や武士の私幣も受け入れられるようになると、伊勢信仰の民衆化がおこり、民衆と伊勢神宮の距離は縮まっていった。14世紀末から15世紀にかけての伊勢には、参詣者が集まり、巡礼センターの機能を持ち始める。中世末から近世初頭にかけては、都市地下人（御師）や伊勢に集まってくる道者が存

在した¹。16世紀後半ころには伊勢講が盛んになるため、講が研究のテーマにも登場してくる。この時代に関しては、伊勢という都市とそこに集まる人々の生き生きとした動態に関する研究がなされている。

江戸時代には、一時的に多くの人々が大挙して押し寄せるといふ現象も起こった。「おかげ参り²」「ええじゃないか³」であり、これもまた、大きな研究分野となっている。

また、伊勢神宮は、その祭神が天皇家と結びつけられて語られるがゆえに、政治形態のあり方に左右されるという側面を持っている。したがって、研究の対象となる時代だけではなく、研究が行われた時代の政治形態によっても、研究動向に違いが出ることも当然である。

例えば、明治から戦後にかけては、国家神道として、天皇と国体との関連が重視され、明治初頭の神仏分離政策など、伊勢神宮の民俗宗教的な側面を滅菌するような政策がとられた。したがって、その当時には、伊勢神宮は不可侵の領域であり、目立った研究が少ない。しかし、第二次世界大戦の敗戦によって、再び伊勢神宮が民衆の手にかえされると、桜井徳太郎による伊勢講の研究や、萩原龍夫、西垣晴次らの精力的な研究がなされた。この時代の研究は、国家神道によって滅菌される以前の、伊勢信仰の「残存」を発掘するというところに主眼がおかれていた。

戦後の研究については、名古屋で行われた昭和58年度日本民俗学会年会におけるシンポジウム「伊勢信仰とその周辺」に集約されている。その際にあげられた視点としては、神宮側からの歴史的展開に関する研究、地域共同体における神明社の勧請や伊勢参宮送迎習俗の意味付け、両者を取り結ぶ伊勢御師の活躍に関する研究があげられ、分野としては伊勢の太神楽をはじめ、民俗芸能に与えた影響などがあげられている⁴。こうした視点は、伊勢信仰を研究する上で非常に重要なものであるが、中には、現在では研究が難しいものもある。例えば、御師は現在では、その子孫しか存在しない。芸能の問題にしても、芸能は伝承されていても、それは保存対象となっているものも多く、したがって、その意味も変化してきている。

では、伊勢信仰は、過去のものになってしまったのだろうか。残存ではなく、生きている伊勢信仰の姿をみることは、もはや不可能なのだろうか。

3. 「伊勢」にまつわる制約と可能性

本来、多様な性格を持っているはずの伊勢の研究史は、様々な制約を受けてきている。それは、立場による制約であったり、時代による思想の制約であったりする。伊勢信仰が、国家と結びついて捉えられてきた伊勢神宮を中心とした信仰形態であるがゆえに、何らかの制約が加わることは避けられない。

確かに、伊勢神宮は第二次世界大戦の敗戦を経て、再び民衆の手にかえされた。そうは言っても、戦後、日本社会も大きく変化している。民衆のもとに戻ってきたと言っても、やはりかつての伊勢信仰とは違ったものになっている。プラスのイメージだけでなく、マイナスのイメージが持たれる場合もある。国家神道と結びつけて忌避反応を示す人々もいるのである。そのような現状を目にするとき、かつての「残存」を見つけようとするのも当然であろう。また、神道一般にしても、明確な宗教の形をとっている宗教教団とくらべると、入信という形をとらななかったり、教典というものを持たない神道は、現代社会においてはかつてのような力を持たないようにも見える。しかし、伊勢という言葉から様々なイメージが喚起されるということも、また事実なのである。

「伊勢」は地名であり、空間を指す言葉であると同時に、伊勢信仰の中心としての重層的意味を持つ言葉でもある。伊勢という言葉からは、さまざまなイメージが喚起される。この点からしても、伊勢信仰は完全に過去のものにはなり得ていないことが示される。

ところで、伊勢神宮や伊勢信仰について、きちんと説明のできる人はどれくらいいるのだろうか。伊勢神宮の場所をどれほどの人が知っているのだろうか。ちょっとした話題に伊勢という言葉がのぼるとき、その言葉に聖性を認めているらしいとわかる場合がある。しかし、話を続けてみると、修学旅行で行ったきりで、よくわからないという。つまり、伊勢信仰は、「よくわからないけれど、ありがたいもの」として認識されてきたものなのである。

私は、この「よくわからないけれど、ありがたい」というの言談が、実は伊勢信仰を考える上で鍵になるのではないかと考える。伊勢信仰は、国家神道化によって形を整えられ、滅菌され、政治の中で違う意味づけをされてきたにすぎないの

だ。

私は、教義を遵守するような宗教形態よりも、むしろこのような「日々の」信仰、生活の規範としての信仰に注目している。そこで、伊勢神道を研究する場合においても、神道学としての「伊勢神宮研究」ではなく、信仰する側にとっての伊勢信仰、生活の中の伊勢信仰を扱いたいと考えている。これは、伊勢信仰を、伊勢神宮だけではなく、「伊勢」という言葉によっても規定された民俗宗教と考えようとする立場である。そしてそれは、各地の伊勢信仰に関する研究の蓄積を、伊勢という都市の持つセンター機能を軸にして展開して行くことにもつながる。

確かに、明治以前から存在している伊勢信仰の「残存」は認められる。しかし、同時に、明治以降の形が整えられた「きれいな」神道も、残っている。つまり、「きれいな」神道と、以前からあった「地つきの」神道が併存しているのである。もちろん、これは、あくまでも分析概念であって、信仰がなされている現場においては、それらがうまく絡まり、それが一体となっているのが現実であろう⁵。

意識的、無意識的にでも、「伊勢」に対する何らかの意味を認めるような「信仰の現場」において、当事者の信仰実践を見てみると、「きれいな」神道か「地つきの」神道かという問題は、研究者が「区別」して、制約を加えているだけにすぎないというように思われてくる。つまり、研究者による過大な分類は、伊勢をありがたいと思う人々の実践を見えなくしてしまう可能性もある。

したがって、敗戦後すぐの状況とはことなり、残存発掘に主眼をおくよりも、有効な研究テーマを模索しなければならない。実際問題として、変化は着々と進んでおり、残存を発掘しようにも、出来ない状況にある。

4. これからの研究課題

以上をふまえて、今あえて伊勢信仰を考えるにあたっての課題をあげ、まとめとしたい。

4-1. 生成のプロセスへの視座

生きている信仰を対象として扱う場合、それは、人々の間で生きているがゆえに変化するの当たり前である。信仰、あるいは「ありがたい」と思う気持ちは、

信仰の実践をより高めて行くため、守って行くための工夫となり、ときとして保存の方向だけでなく、変化の方向へも向かわせる。本義を追求する一方で、変化に向かわせていくエネルギーは何かを問うことも、信仰へのアプローチとして必要だろう。それは、伊勢信仰に関しても言えることである。筆者は、かねてから伊勢において祭礼の研究を行ってきた。祭礼の研究を通して、信仰を守って行くということは、古いものを遵守して行くだけではなく、自分たちなりの信仰の形を表して行くということでもあるということが明らかになってきた。つまり、信心があって、ありがたいと思うからこそ、新しいものをつくり出したり、変化させたりすることもある、ということだ⁶。

4-2. 都市としての伊勢を軸にした再構成

私は、伊勢信仰の広がりや、伊勢という都市のセンター機能を軸に展開しようとしている。

これまでの研究は、伊勢を聖なる側面から「聖地」として捉え、それは、その中心には伊勢神宮が鎮座しているがゆえの「聖地」であるという前提であった。しかし、信仰する人々にとって「伊勢」という言葉が何らかのイメージを喚起するからと言って、かならずしも、伊勢神宮について熟知しているわけではない。祭神が何か知らなくても、ありがたいと思うような信仰。乱暴な言い方をすれば、伊勢信仰は、伊勢神宮を中心とする信仰というより、伊勢神宮のある「伊勢」を中心とした信仰ととらえられるのかもしれない。

だとすれば、もっと世俗的な側面に重点をおいて捉えてみる必要も出てくる。俗世の人間の信仰は、聖なる空間においてのみ実践されるのかと言えば、答えは否だからである。

その場合には、都市人類学、都市民俗学の研究が参考になる。都市は、人やモノが集まってくるセンターである。ゆえに、都市では、異質性、複合性というような、「都市性」が見られる⁷。「宗教」とか「聖なる」とかという冠をはずし、単なる都市として見てみても、異質性や複合性をになっている人々の性格から、演繹的に伊勢の聖性が導き出せるのである。

伊勢には、聖と俗を行き来し、伊勢神宮と民衆をつないだ人々が存在した。御

師、商人、神楽衆と呼ばれる人たちである。特に御師は、あくまでも神宮からの「使者」として全国に散らばっていったけれど、参拝者(客)の世話もするし、様々な伊勢土産を届ける商品流通の「使者」でもあった。聖なる活動に主眼をおきつつも、観光エージェント的な世俗的商業活動をも行うという、きわめて両義的な存在なのである。つまり、宗教都市伊勢は、世俗的な商業論理と一方で強く手を結んできたのである。例えば、阿波の藍商人は、伊勢という聖なる都市で行う商業活動に特別の思いを持っていた⁸。

私は、こうした人々を、伊勢を宗教都市たらしめている重要な要素として位置付けたい。彼らは、異質性と複合性を兼ね備えた両義的存在であり、伊勢という聖なる空間に、絶えず風穴を空けてきたのである。

西山克は、中世末期における巡礼センターとしての伊勢を描いたが、今一度、現在において伊勢という場所のもつ意味を問い直すことが必要である。例えば、伊勢音頭を用いて、ネットワーク型の文化復興の運動がうまれている。伊勢参宮にきた人々は、古市で芸者をあげて、伊勢音頭を歌いながら精進落としをするのが常だった。その伊勢音頭は、形のない土産物として持ち帰られ、伊勢音頭の分布はほぼ全国に広がった⁹。伊勢では各地に散らばっていった伊勢音頭を発見し、伊勢を中心とした伊勢音頭ネットワークをつくることによって、もう一度、伊勢に、かつてのようなセンター機能を取り戻そうとする動きがある。

伊勢には、幅広い範囲から人が集まり、有形、無形の様々なものが交換された。都市は、そこに集まったものを交換する場、あるいは、そこで加工されたものを交換する場でもある。都市は、上記の性格を持つことから、そこでは絶えず何かが生産されている。したがって、伊勢の世俗的側面を捉え直し、都市ならではの生成のプロセスに注目するならば、生きた伊勢信仰の姿を抽出することも可能であると考える。

主な参考文献

- 井上 頼寿 1955『伊勢信仰と民俗』神宮司廳
- 大西 源一 1956『参宮の今昔』神宮司廳
1960『大神宮史要』平凡社
- 桜井勝之進 1973『伊勢神宮』学生社
- 桜井徳太郎 1962『講集団成立過程の研究』吉川弘文館
- 神宮司廳 1928『神宮要綱』神宮司廳
- 新城 常三 1982『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房
- 鈴木 博之 1999『都市へ』(日本の近代10)、中央公論新社
- 高埜 利彦 2000『民間に生きる宗教者』吉川弘文館
- 西垣 晴次 1977『神々と民衆運動』毎日新聞社
1983『お伊勢まいり』岩波書店
- 西垣晴次編 1984『伊勢信仰2』(民衆宗教史叢書) 雄山閣
- 西山 克 1987『道者と地下人』吉川弘文館
- 日本民俗学会 1984「伊勢信仰とその周辺」『日本民俗学』152 pp.17-46
- 萩原 龍夫 1962『中世祭祀組織の研究』吉川弘文館
1985『伊勢信仰1』(民衆宗教史叢書) 雄山閣
- 濱千代早由美 1998「祭りの生成『興玉神社注連縄奉納曳き』をめぐって」『生活学論叢』3、pp. 47-58
1999-a「注連縄をつくる人々—伊勢志摩における民俗の生成と宗教的意味付与の過程をめぐって—」『生活学論叢』4、pp. 43-51
1999-b「関船・ダンジリ巡行と伊勢節」徳島大学総合科学部文化人類学研究室編『徳島大学総合科学部文化人類学研究室報告3 大里八幡神社祭礼』徳島大学総合科学部文化人類学研究室、pp. 52-60
2000「都市祭礼の生成と伝承—伊勢という都市社会を生きるためのつながり—」『祝祭の100年』ドメス出版、pp.42-60
- 宮田 登 1982『都市民俗論の課題』未来社
1996『民俗神道論 民間信仰のダイナミズム』春秋社
- 宮家 準 1989『宗教民俗学』東京大学出版会
2000「今なぜ民俗宗教か」『宗教研究』第74巻第二輯 第325号 pp.145-168
- 宮本 常一 1971『伊勢参宮』社会思想社
- 吉見 俊哉 1991「境界としての伊勢—明治国家形成と〈外部〉の変容」『方法としての境界』赤坂憲雄編、新曜社、pp.2-62

注

- 1 [西山克、1987]
- 2 おかげ参りの中でも特に大規模な群参は、慶安3年(1650)、宝永2年(1705)、明和8年(1771)、文政13年(1830)の四回おこった。空からお札がふって伊勢参り熱が高まったり、伊勢参りの人々が道中で食物や金銭の施しを受けたりしたことから、おかげ参りと呼ばれる。
- 3 慶應3年(1867)の8月から翌年の4月にかけて、東海道の御油宿に秋葉神社のお札が降ってきたのに端を発して、突如として「ええじゃやないか」などと唱えながら、踊り練り歩く騒動が勃発した。この騒動は、東海道・機内を中心にして、中国・四国地方などにも波及した。
- 4 昭和59年 シンポジウム「伊勢信仰とその周辺」(『日本民俗学』152 pp.17-46)。
- 5 こうした問題については、中部人類学会談話会 第138回例会(於椋山女学園大学、2000年5月13日)において口頭発表した。(「祭りの変化に見る地域社会の再編—三重県度会郡二見町の事例を中心に—」)
- 6 [濱千代早由美、1998、1999-a、2000]
- 7 [濱千代早由美、2000 : pp.55-57]
- 8 [濱千代早由美、1999-b.]
- 9 沿岸部でも、稲作のためではなく、漁業のために伊勢が信仰されており、伊勢音頭が歌われている。伊勢は、伊勢湾に面した地形をいかし、海運業もさかんだった。伊勢・熊野の海を舞台に活躍した海の民も存在した。神道儀礼は、稲作民だけでなく、漁民の習俗と共にも語られるべきである。

(はまちよ さゆみ 文化人類学)